

見捨てられた下前津町弥生時代遺跡

—「見捨てられ」の記録—

和田 英雄

1 はじめに

表題を述べるに当たり、飯尾恭之氏を始め、吉田富夫氏（故人）、紅村弘氏、増子康眞氏、桜台高等学校歴史クラブ（当時）の皆さんには、ご指導あるいは土器採取に際し、ご協力をいただいた。また伊藤禎樹氏には、現場において須恵器に関するご指導があった。冒頭に皆様方に深甚の謝意を申し上げる。

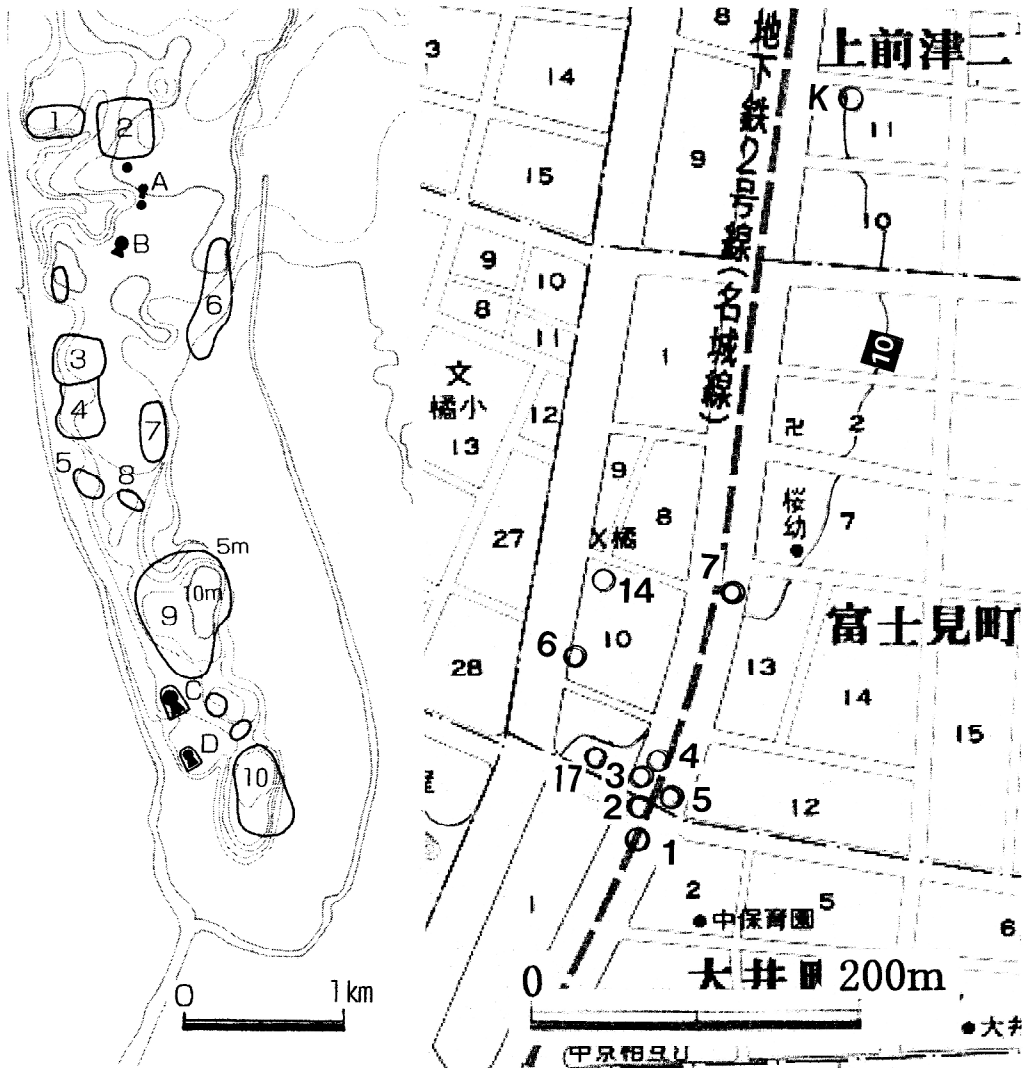
私は、旧下前津町地内において、昭和40年3月から開始された名古屋市地下鉄開通工事及び都市再開発工事現場から弥生土器が出土する度に名古屋市教育委員会文化財係に連絡したが、当時の担当者は「名古屋には弥生時代の遺跡は多くあるので小さな土器片が出たからといって一々連絡してこなくてよい。縄文時代の遺跡を見つけたら連絡して欲しい。」とのことで注目されなかった。弥生時代の遺跡は見捨てられたのである。

私は愛知県社会保険診療報酬支払基金事務所（富士見町2-13、現在は鶴舞社会保険事務所が建っている。）に勤務の傍ら、土砂と共に運び去られる前に出土遺物の採集、出土地点の記録に努めた。

旧下前津町地内から出土した遺物は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、歴史時代の各期に亘るものがあるが、弥生時代の遺物の出土は多く見られた。これら「拾った土器等」に関し、縄文時代、弥生時代については、すでに「春日町遺跡」（注1）、「熱田台地北部東側縁の縄文晩期遺跡の分布について」（注2）、「下前津遺跡」（注3）、古墳時代については「熱田台地北部東側縁の古墳の存在について」（注4）として報告してきたが、今回、表題に係る旧下前津町地内における弥生時代土器等出土地点及び土器等について報告したい。

2 弥生時代土器等の出土地点（第2図）

弥生時代の土器等は、旧下前津町地内9地点から出土している。第2図に採集地点を示したが正確な位置ではない。掘り起こされた土砂の中から「土器等を拾った場所」が異なるということである。



第1図 富士見町遺跡の位置
及び周辺の主な遺跡

第2図 弥生時代土器等出土地点

第1図

- 6 富士見町遺跡 7 古沢町遺跡 9 高蔵遺跡 3 正木町遺跡
4 伊勢山中学校遺跡

(名古屋市見晴台考古資料館研究紀要 第1号/1999 名古屋台地の「水」環境考
第5図、台地上の遺跡と開析谷—瑞穂・笠寺台地を中心に—より引用、加筆作成)

第2図

- K 春日町遺跡 ○印1~7、14、17 旧町名、下前津町遺跡各地点

ところで、熱田台地北部東側縁の遺跡について名古屋市遺跡分布図にあっては、富士見町遺跡（第1図）として一遺跡名で登録されているが、私は採集した資料について、旧町名により整理し、関連する報告書についても旧町名を使用してきたので本報告においては、旧町名を用いて述べることとする。

なお、17地点から弥生時代中期の土器等が出土しているが、土器等について関係方面との調整が必要となることから、今回は報告しないこととする。

（1） 下前津町遺跡1地点

昭和40年10月1日、地下鉄2号線（名城線）開通工事に伴う土留め杭を打ち込むため、この地点で南北に幅1mの溝を掘ったところ、地表下1m20cmの黒土層から完形に近い甕形土器（第7図16）が横位の状態（口縁部が北向き）で発見された。土取り工事の進展と併せて黒土層中から土器片、石鏃を採取することができた。

（2） 下前津町遺跡2地点



第3図

第1地点から北側へ土取り工事が進み、昭和41年1月20日に現場に赴くと第3図

に示す壁面が露出していた。すでに地表から約2 m掘り下げられていたが、危険を承知の上、壁面に足場を造り1 mの折尺を立てて水平糸を張り写真撮影を行い、混貝土層中及び混貝土層下黒土層から「専門家が軽蔑する」狸掘りにより土器片を採取するのが精一杯であった。

貝類は崩れ落ちていた土砂のなかから採取したものであり、ハマグリ、サルボウ、シジミ、カキ、アカニシを確認することができた。

この混貝土層については面による調査がされていないので時期について特定できない。土取り進行の過程で露出した混貝土層断面に土器片が覗いていたので、ただ抜き取ったものである。

(3) 下前津町遺跡3地点

昭和40年11月30日、地下鉄工事により、西側に隣接する民家の下水管が損なわれるため、幅1 m長さ約6 mの溝を掘り下水管の補完工事が行われたが、表土下約1 m 90 cmの位置にハマグリ及びカキの破砕片、土器片、そらまめ大のチャート小石及び木炭片が散乱しており土器片を採集した。西側壁面に幅70 cm程の貝殻破砕片、そらまめ大のチャート小石、木炭片、土器片の包含層が確認できたが工事のため厚さは確認できなかった。昭和41年3月頃、土取り工事が北側へ約3 m進んだ位置で再び土器片が出土し始めたので、この場所を下前津町4地点とした。

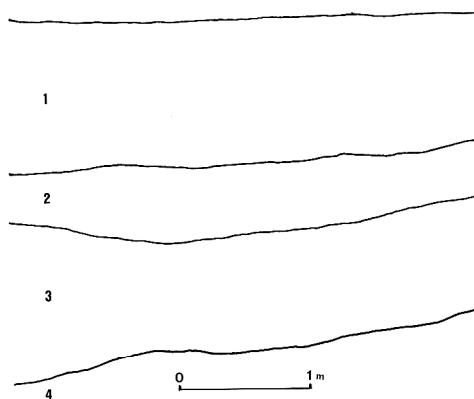
(4) 下前津町遺跡4地点

昭和41年3月9日、3地点から続く地点の土取り中に約1 mの表土の下から山茶碗および須恵器の破片等を含む40 cmほどの混乱土層があり、その下から90 cmほどの弥生土器包含土層が露出したので、名古屋市文化財保護委員であった吉田富夫氏に連絡したが、氏の来所が不可能であったので、当日は遺物の採集に務めた。翌日は休暇が取得できなかったが、吉田富夫氏を初め飯尾泰之氏、桜台高校歴史のクラブ員諸氏の来所があり調査が進められた。

特に飯尾泰之氏は、若さと豊富な考古学知識並びに発掘経験があり、私が退社後、工事現場に来てみると弥生土器包含層の下から縄文晩期土器、堅果等を包含する層を検出されていた。また紅村弘氏、増子康真氏のご指導のほか伊藤禎樹氏の須恵器に関するご指導があり、この調査については、名古屋考古学会会報No. 15に下前津遺跡として発表できたが、40年後に再び表題について報告できることは、工事現場において、ご指導、ご協力いただいた皆様のおかげであり深甚の謝意を申し上げる。

なお土取り終了後の西側壁面の写真は光量不足、不鮮明のため第4図に実測図

(メモ)を示した。左(南側)が3地点、右(北側)が4地点である。



第4図

- 1：戦時中の瓦礫等を含む表土層 2：山茶碗・須恵器の破片等を含む混乱層
3：弥生土器を含む黒色土層 4：硬質砂層

(5) 下前津町遺跡5地点

3・4地点から8～9m東側、南東向きの緩斜面において地表下1m70cmの位置で掘り起こされた茶褐色の砂の多い土砂（黒色土層と異なる）の中からパレススタイル壺の口頸部を主体とする土器片が纏まって散乱しており採取した。土取り工事における東側壁面の観察では20cmの表土の下に1m40cm程の褐色土層があり、その下は茶褐色砂層となるが、山茶碗、須恵器、弥生土器片を包含していた。弥生土器片は磨耗しているものもある。

なお土取り中には西から低地の東に亘り掘り起こされた茶褐色の砂の多い土砂（黒色土層と異なる）の中からも山茶碗、須恵器、弥生土器片を採取することができたことから、西側上部から東側低地方向の溝の一部であったと考えている。

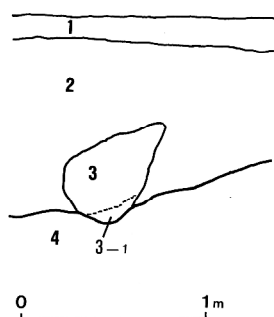
(6) 下前津町遺跡6地点

この地点は10m等高線より上位置にある。

昭和41年7月20日、ガソリンスタンド建設のため土取り工事中に壺型土器の胴部が縦位で覗いており、土地所有者の了解の下、採取することができた。

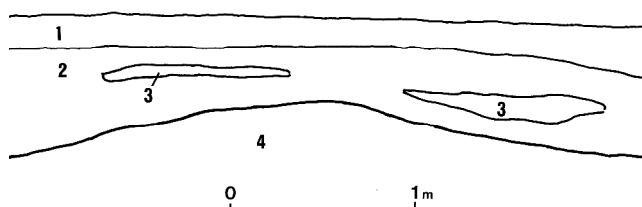
数日後、工事現場に来て見ると土取り工事は終了しており、北側壁面に第5図及び第6図に示す貝層が現れており工事現場責任者の了解の上、簡単な実測(メモ)を行うことができた。

第5図に示した貝層は、15cmの表土の下に約1mの黒土層があるが黒土層の下位でV字状の断面を示していた。規模は、上位幅50cm、深さ55cmのハマグリが主で少量のカキが混じる混貝土層であり、底部は約8cmのウミニナのみ堆積となり下に土器片が敷かれていた。



第5図

1：表土 2：黒土層 3：混貝土層
3-1：ウミニナの堆積層 4：硬質砂層



第6図

1：表土 2：黒土層 3：破碎貝片が
混じる混貝土層 4：硬質砂層

第6図、左方の貝層は、15cmの表土の下に約30cm～52mの黒土層があるが、黒土層中に厚さ5cm～10cm、幅1mのハマグリ、カキ、アカニシ、ウミニナの破碎貝片が混じる混貝土層である。混貝土層中から壺型土器及び甕形土器の口縁部（第10図44、45）が出土した。

右方の貝層は、15cmの表土の下に約40cm～50mの黒土層があるが、中位置に、厚さ13cm、幅1m10cmのハマグリ、カキ、アカニシ、ウミニナの破碎された貝片が混じる混貝土層である。

なお第5図から第6図の間の層位に架かる実測(メモ)は工事のため行うことができなかった。

(7) 下前津町遺跡7地点

この地点は6地点と同様、10m等高線より上位置にある。

昭和41年4月23日、地下鉄開通工事のため南北に幅90cmの溝を掘削中に縄文晩期土器片、石器等が散乱しており、名古屋市交通局地下鉄工事東別院工区責任者に連絡の上、現場の工事責任者の了解の下、遺物の採集に努めた。

掘削に伴い東側壁面には住居址と考えられる跡が露出しており、崩れ落ちた土砂の中

からも縄文晩期土器片、石器等を採集することができた。また形のある弥生土器も出土した(第15図1、2)。住居址らしき断面について写真撮影したが、私の勤務の都合で数日後に現場に来てみるとH鋼の間に土砂崩壊防止の矢板が嵌っており実測することができなかった。

(8) 下前津町遺跡14地点

この地点も6、7地点と同様、10m等高線より上位置にある。

昭和44年7月24日、結婚式場改築工事中に掘り起こされた黒土層中から弥生土器片、須恵器有台坏、無台坏及び内耳鍋の破片を採集した。

(9) 下前津町遺跡17地点

昭和49年5月、当時、名古屋市文化財パトロール員であった私は、名古屋市中区区内をパトロール中に、貝層の存在が推定されていた名古屋市中区富士見町12番地(当時、「時照庵」と呼ばれていた)において昭和49年12月から家屋と駐車場の建設工事開始情報について入手したので、名古屋市教育委員会へ連絡したところ、昭和49年12月2日から名古屋市緑区古窯跡の発掘調査と併行して行政機関直轄で発掘調査が実施されることとなった。調査では黒土層中に小土器片が包含されていただけで、なんら遺構は検出されなかったということであり、調査の主力は併行して行われていた古窯跡の調査に注がれていた。

しかし、この地点から20m程東側で行われた地下鉄工事では、貝層や土器包含層が発見され多数の土器片を採集していたことから、貝層及び土器包含層の存在を予想して駐車場建設予定地を工事担当、川村工務店のご協力により試掘したところ、地表下約2mの位置において弥生時代中期の貝層を発見したのである。

貝層が存在することが明らかになると名古屋市教育委員会社会教育課文化財係は調査を実施することとなった。この調査には、増子康真氏と私が参加し、試掘時の資料と併せて保管しているが、いまだ保管資料の取り扱いについて何の音沙汰も無い。

3 弥生時代土器等

(1) 下前津町遺跡1地点の土器(第7図)

地下鉄工事の土取り工事中に採集した土器は弥生時代の各時期に及ぶものがある。

1は口縁部が受口状となり屈折部外面に貝殻腹縁による刺突文、頸部に櫛状具による横線文が施されている。7は口縁屈曲部外面に貝殻腹縁による刺突文が施されている。頸

部は荒い刷毛状具により器面調整が為されている。8は頸部に櫛状具による波線文、竹管状具による円形文、7mm幅の櫛状具による縦位の刺突文を施し、胴部には7mm幅の櫛



第7図 下前津町遺跡1地点の土器

状具による横位の刺突文を胴回り縦列に8箇所施して、その間に篋状具による横線を施すものである。名古屋市古沢町遺跡(注5)及び一宮市町屋遺跡(注6)出土土器に同形のものがあるが、古沢町遺跡及び町屋遺跡出土例は円形文が円形押捺を加えたボタン状貼付文となっている。9は粗い刷毛状具による調整の上から頸部には櫛状具による横線文、胴部には胴回り推定8箇所に貝殻腹縁による刺突文を施し、その間に篋状具による横線

が施こされている。

16は口縁部下端に刷毛状具による刻みが施され、胴部も同種工具により器面調整がなされている。胴部中ほどに約10cm幅のスス状物質付着の痕跡及び痕跡上に剥離痕が廻っている。底部には径5mmの焼成後の一孔を穿ち、内面及び外面は黒色を呈している。口縁径22.8cm、器高27.5cm、胴部最大径20.8cmを測る。

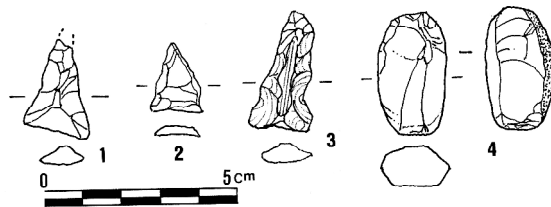
18は口縁部内側に櫛状具による列点文を配した条痕文深鉢形土器の破片である。ほかに口縁上下端に刻み目文を施したもの17、研磨帯のある土器片2～6、12、13がある。

次に33～52は壺、甕、高坏形土器の破片である。34は円窓付壺の破片である。頸部に櫛状具による刻目文が施され胴部は無紋である。円窓径は推定11cmを測る。41は坏部口縁が鏝状に造られた高坏形土器の破片である。口縁端面に凹線の痕跡が窺える。焼成不十分のためであろうか、胎土内にサンドイッチ状の黒色部分が見られる。

45は有段口縁の甕形土器の一部であり、上部方向に折り曲げられた口縁部内側から胴部外面に亘り刷毛状具による調整が為されている。

(2) 下前津町遺跡1地点の石器 (第8図)

3は、一見、厚さ4mmの板状の黒曜石原石を使用したと考えられる無茎鏃である。両面に線条痕が観察できる縦位の研磨部分が見られるが、板状の黒曜石原石の風化面であ



第8図 下前津町遺跡1地点の石器

るのか、川添和暁氏(注7)が想定する製作痕であるのかどうか。研磨の痕跡は窺える。1、2、4はサヌカイト(下呂石?)製である。

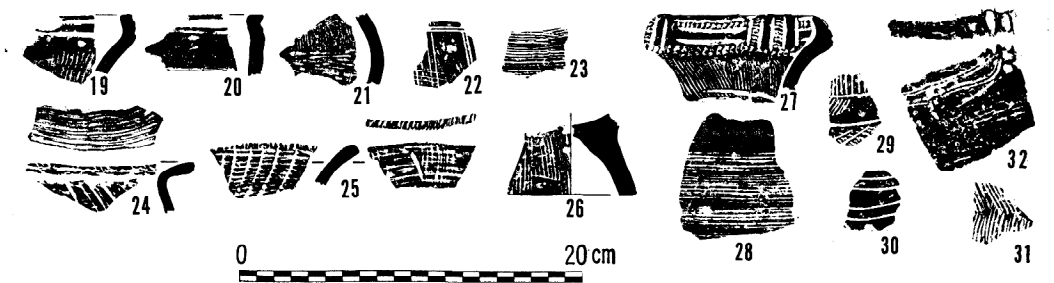
(3) 下前津町遺跡2地点の土器 (第9図)

混貝土層中及び混貝土層下黒土層から「専門家が軽蔑する」狸掘りにより少量の土器片19～26(混貝土層中)、27～31(混貝土層下黒土層)を採取することができた。

混貝土層中から採取した土器片40点のうち9点について図示した。口縁部に凹線文が施されたもの19、20、甕形土器口縁部内側に薄い貝殻腹縁と考えられる施文具による刺突文が施されたもの25がある。

混貝土層下黒土層から採取した土器片15点のうち6点について図示した。27は口縁部が受口状を成し、口縁部外面4箇所縦位5本の篋状具による沈線文及び横位の篋状具による沈線文を配し、沈線により区画された部位に貝殻腹縁による刺突文が施されている。頸部には篋状具による沈線が廻らされている。

縄文土器32がある。器形は波状口縁鉢形土器を想定している。肥厚した口縁端部外側には半割竹管状具により2本の弧線と棒状具による刺突が2箇所施され、さらに波状口縁の頂部に篋状具による3個の押圧の跡が窺える。



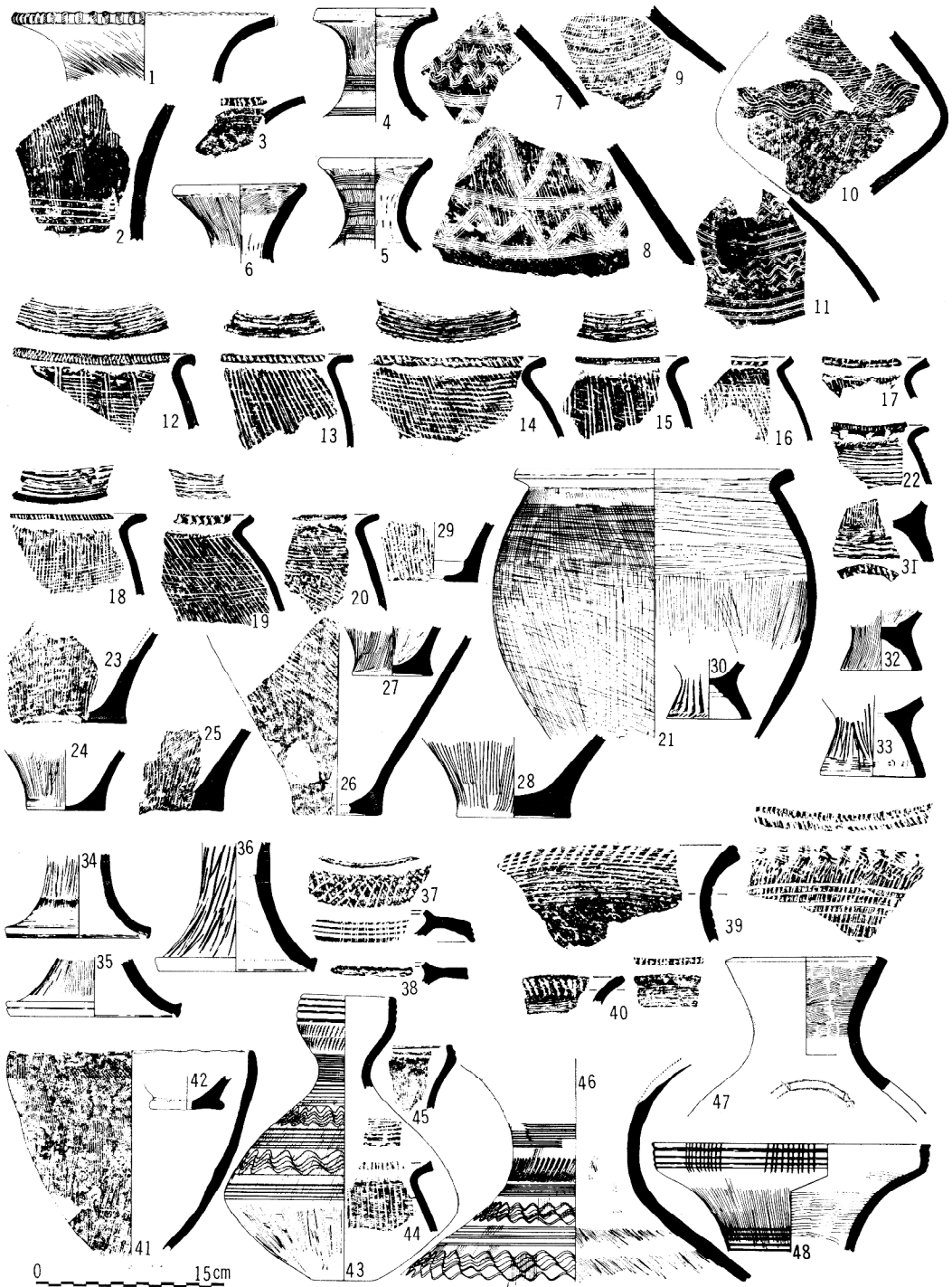
第9図 下前津町遺跡2地点の土器

混貝土層中：19～26、混貝土層下黒土層27～32

ほかに条痕文深鉢形土器の小破片、篋状具による沈線及び沈線間に縦線並びに斜線を施した小破片、櫛状具による横線文や篋状具による横線文の間に研磨による器面調整の痕を観察することができる小破片がある。

(4) 下前津町遺跡3地点の土器 (第10図1～42)

1は口縁が単純に外方に開き口縁端部に刷毛状具による強い押圧が加えられており、そのため口縁端が漣状を呈する壺型土器の破片と考えられる。口縁部径2.1cmを測る。細頸壺の口頸部4、5、6がある。4は口縁部が受口状となり頸部下位及び胴部に櫛状具による横線文が施されている。5は単純に開く口縁端部は成型が不完全な凹凸面を残



第10図 下前津町遺跡3、4、6地点

3地点 1~42 4地点 46~48 6地点 43~45

し、口頸部から胴部に至る部分に櫛状具による横線文が施されている。6は口縁端部を僅かに内面に折り曲げ外面は刷毛状具による器面調整が施されている。

甕形土器は、大半が口縁部内側、口縁端部および器面が刷毛状具により調整がなされている。12は横位の刷毛状具により調整された器面に縦位の2本線が窺えるが、竹材等による編まれた籠を髣髴させるものである。20は胴部に波線が施されている。21は下胴部が欠損しているため脚台が付くのか、全形は窺えない。頸部は、くの字状に外折し胴部はあまり張らない器形である。上胴部外面は刷毛状具による縦横の調整が施されている。胴部中央部のスス付着部分に吹きこぼれの跡を観察することができる。口縁径22.5cm、胴部最大径25.9cmを測る。

底部は平底23～29、脚台部30～33の両者がある。32の脚台部の他は、全例に底部内面及び外面、脚台部にあっては底部内面および脚台内面の色調が加熱による黒色を呈している。29は底部内面を削り取って薄くして約1.3mmの焼成前の穿孔がみられる。

坏部口縁が鏝状に造られた高坏形土器2固体37、38がある。37は口縁部が鏝状を示して外方にのび、口縁部内側には凸帯を設け、鏝状部上面には暗文手法（篋磨手法）による斜格文が施されている。鏝状部の先端は幅広にして凹線文を施し、上から2本3組の櫛状具により縦線が施されている。38は鏝状部先端に凹線を窺うことができる。34、35、36は高坏形土器の脚部と考えられる。

39は口縁部径約50cmを測る深鉢形を呈する大型土器である。器表面は荒い刷毛状具による調整が施され上胴部に篋状具による数条の沈線が窺える。口縁内面には櫛状具による刺突列を加え、口縁端外面に刷毛状具による押圧が施されている。40は口縁内側及び口縁端に貝殻腹縁により刺突が施されている。

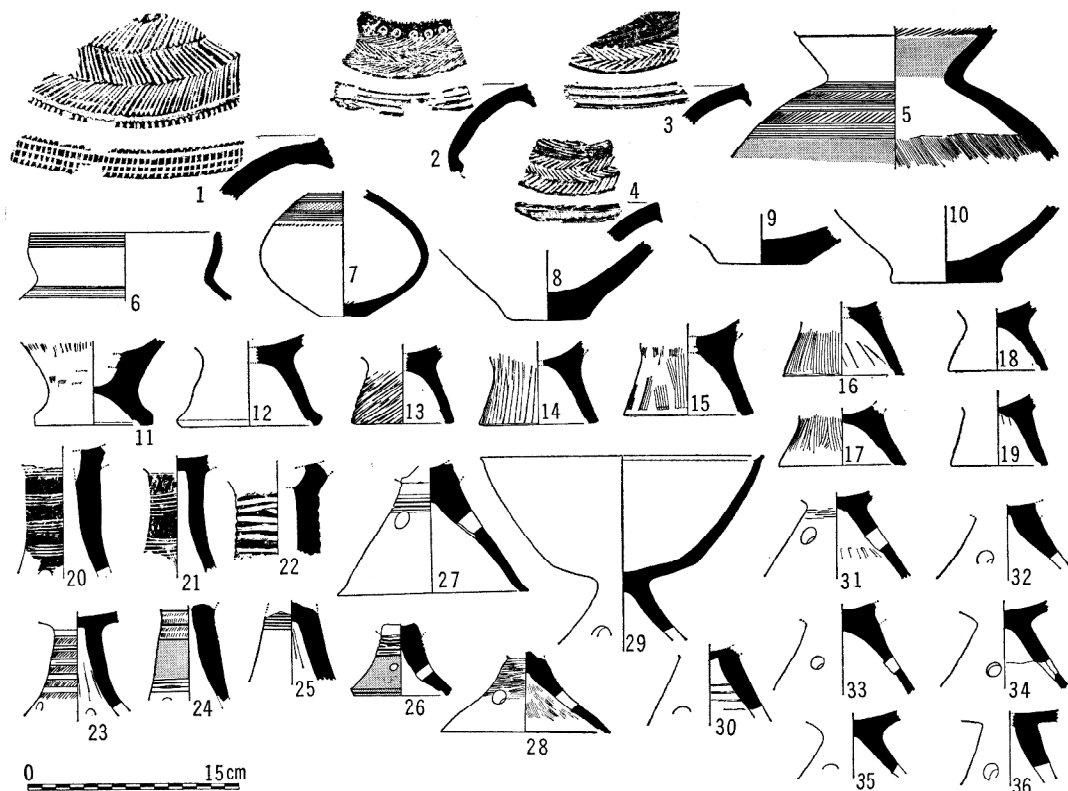
41は成型が不十分な深鉢形土器である。器表面上部は刷毛状具による調整が施され、下部は篋状具による削り調整が施されているが、全体に凹凸面が残り口縁部は漣状となっている。42は径8mmの焼成前穿孔がある底部であり、色調から41と同一固体と考えられる。

(5) 下前津町遺跡4地点の土器（第10図46～48、第11図、第12図）

第10図、46、47及び48は3地点から4地点に土取り工事が及んだ段階で飯尾恭之氏並びに桜台高等学校歴史クラブの皆さんにより採集されていた土器である。

46は口縁部および胴部が欠けるが残存胴部径は2.8cmを測る堅焼の焼成状態を呈する大型の壺形土器である。頸部に櫛状具による刺突文、胴部には櫛状具による横線文の下に2本一組3本の櫛状具による波線文および平行線文が施されている。47は胴部

上位置に丸窓が付く土器である。口縁部内面に刷毛状具による調整が施されている。器表面は磨滅しているが刷毛目調整の跡は窺える。4 8は外方へ大きく開いた口縁部を上方に垂直に折り曲げ受口状にしている。口縁外面に凹線及び凹線上に櫛状具による縦線が加えられ、頸部には櫛状具による横線文が施されている。口縁部径22.3cmを図る。

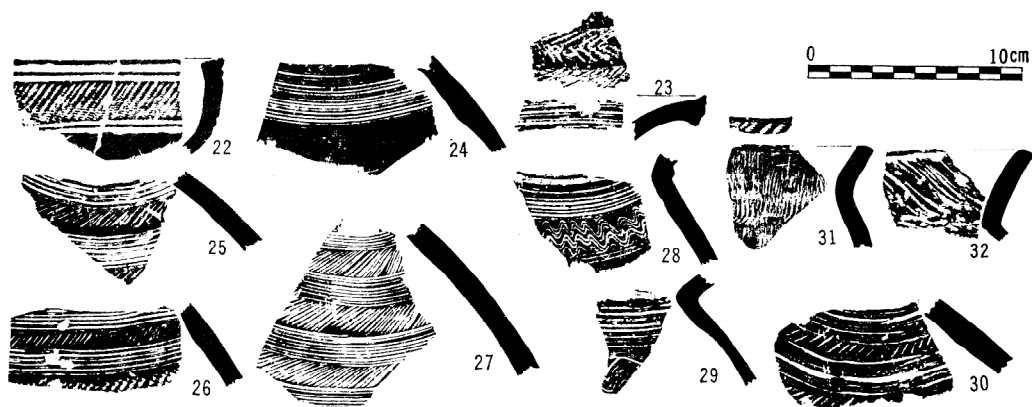


第11図 下前津町遺跡4地点

第11図、広口壺の口縁部1、2、3、4、第12図、23がある。1は口縁部内側に櫛状具による羽状の刺突文を施し、口縁端部は幅広くして沈線文の上から櫛状具により縦位に刺突を巡らしている。破片からの推計であるが口縁部径は50cm~60cmとなるであろう。胎土は赤レンガ色であるが文様帯面は白味を帯びている。2は口縁部内側に先端が尖った篋状具により描かれた羽状文、竹管状具による2重円の刺突文が施され、以下、頸部に亘り赤彩が施されている。口縁端部は幅広くして凹線文を巡らして口縁部外面にも赤彩が施されている。3は口縁部内側に櫛状具により羽状の刺突文を施し口縁端部は幅広くして凹線文を施している。赤彩は見られない。4は口縁部内側に櫛状具により羽状に刺突文を施している。口縁端外面に凹面を観察できる。赤彩は見られない。5は口縁部が欠

損しているが、口縁部内側に櫛状具による羽状文が観察でき口縁部外面に一条の篋状具による沈線が見られる。胴部上位に櫛状具による平行線文及び斜位の刺突文が施され、口縁部および胴部の文様帯の下は赤彩が見られる。第12図、23は口縁部文様帯の下および頸部に赤彩が施されている。

第11図、高坏の脚部20～28、30～36があるが、20、21、22、25、26及び27は篋状具による横線文が施されている。26は文様帯の下から端面に亘り赤彩が施されている。22は横線文の上から赤彩が施されている。28は脚部上部に櫛状具により横線帯を設けている。ほかに3本歯の櫛状具による横線文と貝殻腹縁による刺突文を5段施したもの23、篋状具による3本の沈線の上に繊細な篋状具による刺突文を横2列に2段巡らして下方に篋状具による沈線を巡らして文様帯間に赤彩を施している24がある。



第12図 下前津町遺跡4地点

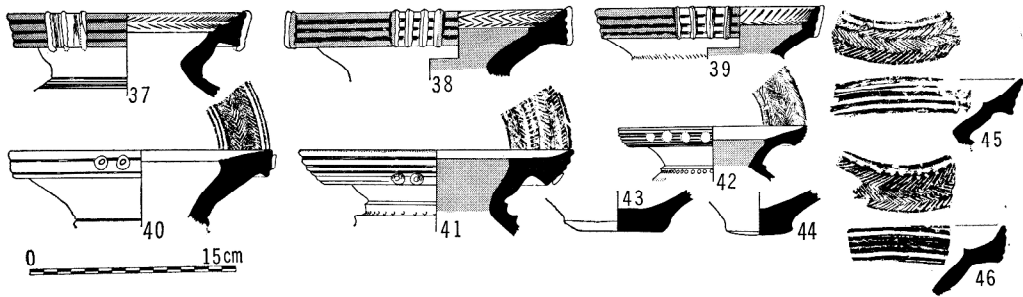
第12図22は口縁部外面上部および下部に凹線文を施し、その間に斜頸の刺突文を巡らしている。ほかに壺形土器の胴部破片等がある。

(6) 下前津町遺跡5地点の土器 (第13図、第14図)

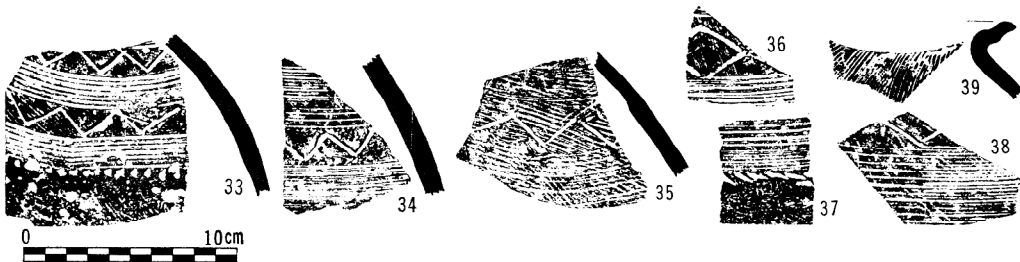
第13図、パレススタイル壺の口頸部(8固体)及び底部(2固体)、第14図、胴部の破片がある。8固体とも口縁部内面は稜によって平坦面を設けて文様帯として、そこに羽状文を施している。口縁端部の凹線上には棒状浮文またはボタン状浮文を貼付している。

第13図、40及び45の口縁部には外面、内面とも赤彩は見られない。46は拓影のため表示できないが、口縁端部および口縁部内面文様帯の下段には赤彩が見られる。

14図、胴部33は直線文・山形文及び文様帯下段に列点文を施している。35は刷毛目を残した上から横線文および山形文を施しているが山形文の上からの赤彩は見られない。36は山形文が2段重なることにより菱形となっている。この菱形文が胴部周囲に施さ



第13図 下前津町遺跡5地点



第14図 下前津町遺跡5地点

れていたのか、小破片であり明らかでない。

13図、底部43及び44は2例であるが丸味を帯び、壺を置くには不安定な形を呈している。第14図39は所謂「S字甕」の口縁部である。

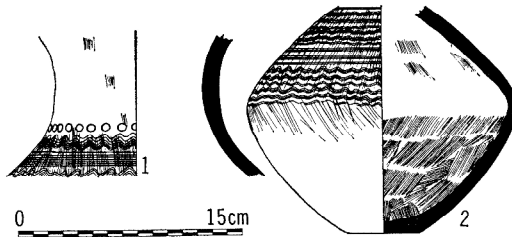
(7) 下前津町遺跡6地点の土器 (第10図43~45)

細頸壺形土器43がある。受口状の口縁部に凹線文・櫛状具による列点文を施し頸部には櫛状具による横線文(簾状を呈する)を施している。ソロバン玉状の胴部には5本一組の櫛状具により横線文・波線文を施している。口縁部が一部欠損のため片口状口縁を成していたかは不明である。胴部最大径18.5cm、器高23.0cmを測る。この土器は1994.10に名古屋市博物館において開催された「あゆち瀉の考古学」展に展示されたが、出品目録の説明では胴部最大径20.2cm、器高27.8cmとなっている。

ほかに凹線文が施された壺形土器口縁部片45、甕形土器口縁部片44がある。

(8) 下前津町遺跡7地点の土器 (第15図)

1は頸部から胴部に亘る部分に竹管状器具による円形文、櫛状具による波線文および横線が施されている。頸部最小径は11.0cmを測る。2はソロバン玉状の胴部器表面

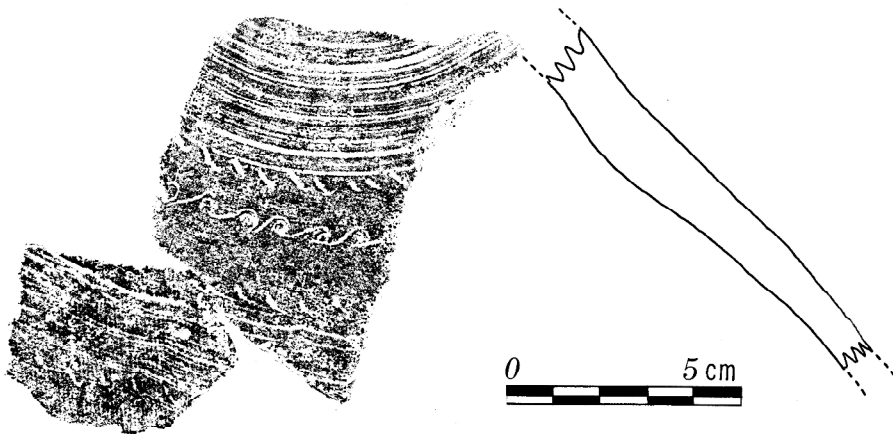


第15図 下前津町遺跡7地点

上部に3本、3本、2本の線を描くことができる櫛状具による波線文および横線が施され胴部器内面は刷毛状具により調整が施されている。1、2とも他地点の出土土器と比較して保存状態はよくない。

(9) 下前津町遺跡14地点の土器 (第16図)

先端部が不揃いの細い櫛状具による横線文が施され、その下に篋状具による刺突文、



第16図 下前津町遺跡14地点

先端が尖った篋状具による連続渦巻き文が施され、以下、刺突文、横線文が繰り返し施される壺型土器の上胴部の破片と考えられる。器面は黒色を帯びた色調を呈している。

4 おわりに

第2図に10m等高線を示したが、10m等高線より上位置にある下前津町遺跡6地点及び7地点から出土した土器は、完形または完形に近いものがある。しかし10m等高線より低位置にある下前津町遺跡1、2、3、4及び5地点から出土した土器は、1地点の深鉢形土器（第7図16）のほかは、弥生時代中期から後期に亘る破片となった土器群である。

これら土器群については資料不足のため、器面の調整方法・凹線・赤彩等に基づき体系的に述べることはできない。また弥生時代遺跡関係の報告書に述べられることがある弥生時代土器様式の細別の中には、浅学の私には理解できないものもあるので細別もできないが、パレススタイル壺の口頸部及び深鉢形土器について述べてみたい。

下前津町遺跡5地点から採取したパレススタイル壺の口頸部については、8固体とも口縁部内面は稜によって平坦面を設けて文様帯として、そこに羽状文を施し、口縁端部の凹線上には棒状浮文またはボタン状浮文を貼付している。また胴部破片には、横線文および山形文が施され、35を除き山形文に赤彩が見られるが、これらパレススタイル壺の口頸部の形態及び胴部文様のあり方からE類（古・中・新）が設定されたことがある。（注8）

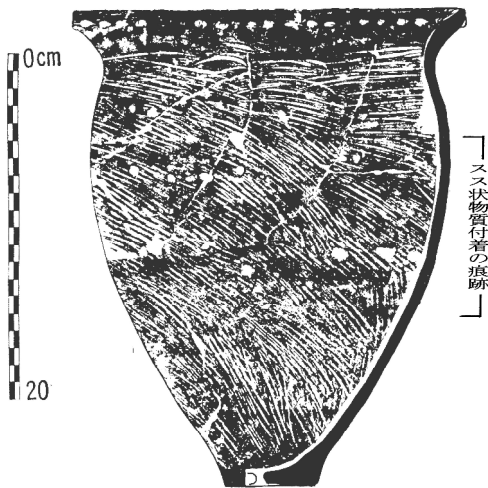
予算と時間が約束された発掘調査でなく工事現場における同地点から拾った土器片の集積に過ぎないパレススタイル壺について、敢えて外見上の類似点で比較するならば、下前津町遺跡においてもE類（古・中・新）を使用していたことは確かである。また、第14図36

の胴部破片には山形文が重なることにより菱形となっているが、管見では、出土例、報告例に接したことが無く、パレススタイル壺胴部破片に横線文、山形文のほかに菱形文（上から赤彩）を新例として加えたい。

次に甔として使用されたと考えられる底部に焼成後の一孔を有する甕形土器がある。

（第17図）胴部中ほどに約10cm幅のスス状物質付着の痕跡及び痕跡上に剥離痕が廻っている。底部には焼成後に径5mmの一孔を穿ち、内面及び外面は黒色を呈している。口縁径22.8cm、器高27.5cm、胴部最大径20.8cmを測る。

小林正史氏・柳瀬昭彦氏は「コゲとススからみた弥生時代の米の調理方法」において、甕の置き方および炊飯方法を復元されているが（注9）、17図、甕形土器における胴

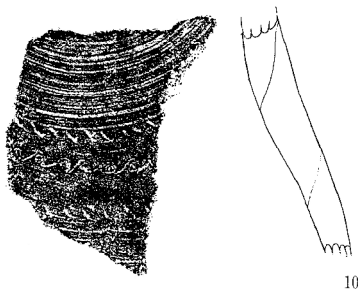


第17図

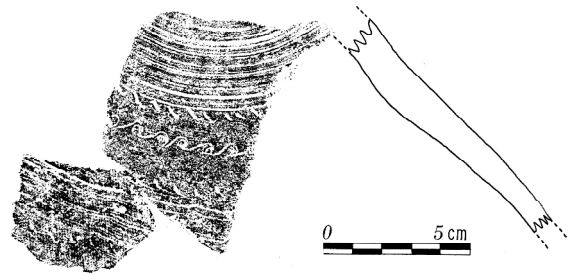
部、甕の置き方および炊飯方法を復元されているが（注9）、17図、甕形土器における胴

部スス状物質付着の痕跡及び痕跡上の剥離痕の状態が、甕を「支柱」に浮き置き使用によるものなのか、改めて検討したい。

最後に資料の取り扱いについて述べたいことがある。下前津町14地点出土連続渦巻き文が施された壺型土器胴部破片については『愛知県史』資料編2（注10）にも紹介されているが、私の実測図と異なる。私は、大学で考古学を学んだことが無い素人であり、過去に報告書の中で多くの過ちを犯している。私の実測方法にどのような誤りがあるのか、ご指導願いたい。



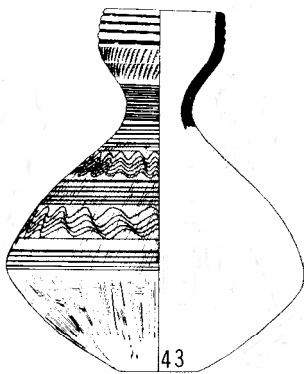
第18図 愛知県史 資料編2



第19図 私の実測図

次に第20図の土器は、1994、10に名古屋市博物館において開催された「あゆち潟の考古学」弥生・古墳時代の名古屋企画展にパレススタイル壺と共に展示されたが、展示図

録出品目録の説明では、胴部最大径20.2cm、器高27.8cmとなっている。しかし私が実測すると胴部最大径18.5cm、器高23.0cmとなる。私の実測方法にどのような誤りがあるのか、ご指導願いたい。



第20図

ところで展示図録出品者のページに出品者である私の名が無い。どうも工事現場の土砂の中から「拾った弥生土器」は学問的価値が無いらしい。展示ケースの中では「枯れ木も山の賑わい」程度のものであったのか。

ホームページ(<http://park19.wakwak.com/~wadakouko/>)に本報告関係資料について公開しているので、さまざまな視点からのご教示をいただきたい。

注

- 1 和田英雄 昭和48年1月 『春日町遺跡』
- 2 和田英雄 1978 「熱田台地北部東側縁の縄文晩期遺跡の分布について」『古代人』34 名古屋考古学会
- 3 吉田富夫・紅村弘・和田英雄・飯尾恭之 1970 「下前津遺跡」『名古屋考古学会会報』№15 名古屋考古学会
- 4 和田英雄 2005年3月 「熱田台地北部東側縁における古墳の存在について」『古代人』65 名古屋考古学会
- 5 和田英雄 1974 「古沢町遺跡発掘調査報告—弥生時代編—」『名古屋市文化財報告Ⅱ』 名古屋市教育委員会
- 6 紅村 弘 昭和38年5月10日 「町屋包含地」『東海の先史遺跡、総括編』 名古屋鉄道株式会社
- 7 川添和暁 平成17年3月31日、平成16年度 「縄文時代後晩期の石鏃について—一部分磨製石鏃を中心に—」『研究紀要』第6号 財団法人、愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
- 8 浅井和宏 1986年11月1日 「パレススタイル」『欠山式土器とその前後』 愛知考古学談話会
- 9 小林正史・柳瀬昭彦 2002.5 「コゲとススからみた弥生時代の米の調理方法」『日本考古学』第13号 日本考古学協会
- 10 連続渦巻文を施文した広口壺片 平成15年3月31日 『愛知県史』資料編2 考古2 弥生 愛知県